

令和3年度 美術の学校

「クレパス（オイルパステル）画ワークショップ」

開催結果報告

<子ども向け>

イベント名：クレパスと水彩絵具を使って、油絵みたいな絵を描く

日 時：令和3年11月20日(土) 午前9時30分～12時（2時間30分）

講 師：土井久幸氏（洋画家）

独立美術協会準会員、日本美術家連盟会員、和歌山県美術家協会会員
ヴェロン會同人、Doi 絵画教室主宰

会 場：一宮市三岸節子記念美術館 講義室

参加人数：年中～小学4年生 14名、一般 1名

参加費：1,000円

職 員：大村、長岡、丹野、名和

<大人向け>

イベント名：クレパスを使って本格的な絵を描く

日 時：令和3年11月21日(日) 午前9時30分～12時30分（3時間）

講 師：土井久幸氏（洋画家）

会 場：一宮市三岸節子記念美術館 講義室

参加人数：一般 15名

参加費：2,000円

職 員：大村、長岡、野田、丹野、名和

美術の学校は、一宮市三岸節子記念美術館で年に1回開催しているアーティストや美術史の専門家を講師に招いた美術教室です。

今年は講師にクレパスを使った風景画を中心に作品を発表している洋画家・土井久幸先生をお招きして、「クレパス画ワークショップ」を開催しました。



一宮市出身の女性洋画家・三岸節子もよくクレパスを使って絵を描いていたことから、節子や土井先生といったプロの画家も使用するクレパスという画材の魅力、楽しみ方を知ってもらおうと企画しました。



まず、11月20日(土)に開催した子ども向けの回では、「クレパスと水彩絵具を使って、油絵みたいな絵を描く」をテーマに開催。テーブルには、あらかじめ絵のモチーフとなるものが、「クリスマス」、「秋」、「花」、「おもちゃ」をテーマに置かれています。来た子から描きたいもの、描きたい角度を決めて席に座ります。

決まったら、まず画用紙に鉛筆で描きたいものを“自分の目に見えたように”描いていきます。土井先生は、「自分の目にはどう見えているかな」、「見えたものを大きく、見えたように描こう」、「形や色をまちがえてもいいよ、絵を描くことに失敗はないからね」、「間違えたと感じても描き続ければ、それがいい味になってくるよ」とこどもたちにアドバイスを。描くことがむずかしいと悩んでいるこどもたちも生き生きと手を動かすようになっていきました。



下描きが終わったら、次はクレパスで色を塗ります。「クレパスの正しい使い方、みんなは知ってるかな?」、「クレパスは使いたい長さに折っちゃいましょう!折ってクレパスの側面を使えば、広い面積を一度にぬれたりするんですよ」と先生。これにはこどもたちも保護者のみなさんもびっくりしていました。

また、クレパスの特性は、かるく塗っただけでも絵や色に奥行き、厚みが出ることだと教えます。たとえば、赤いクレパスを塗った後に、上から赤の水彩絵具の具でうすく色を塗れば、水彩絵具だけのときには出なかった質感を簡単に出すことができます。また、白いクレパスで白い紙の上に線を書き、薄く青色の絵の具を上から塗るだけで、クレパスが絵の具をはじき、白い模様が浮かび上がります。クレパスを折ってみたり、新しく学んだ技術を使ったりして、こどもたちは熱心に色を塗っていきます。

あっという間に2時間が立ち、最後に講評会をおこないました。「自分の目に見える色で塗ってね」と先生にいわれたとおり、できあがった作品には意外な色が使われていたりしました。中には、モチーフが置かれていたテーブルクロスにギンガムチェック柄を大胆に配置した子も。画面全体の背景にチェック柄を引き延ばし、チェックの交わる濃淡をクレパスで表現しています。「テーブルクロスのチェック柄がとても目を引いたんですね」、「このチェック柄の色の変化に気づける子はなかなかいないんだよ」と先生も驚いていました。



また、ある子は透明の瓶を真ん中に描き、瓶を透かして見た風景を描いていました。瓶を通して見ることによって、モチーフの輪郭が屈折しおもしろく変形して見えます。それを巧みに捉えた作品に、「うまく描けないと悩んでいたみたいですが、この色のゆがみがあることによって瓶を通して見た風景だとこの作品を見た人も気付くのですね」、「とても良いと思います」と声をかけていました。



100人を超える応募があった今回のクレパス画ワークショップ。参加してくれた子たちも本当に熱心に取り込んでくれ、終わった後も先生をつかまえて教えてもらっている子もいました。

11月21日(日)に開催した大人向けの回では、「クレパスを使って本格的な絵画を描く」がテーマです。子ども向けの回とはまた変わり、イーゼルを設置し、使うクレパスも「サクラクレパススペシャル」という本格仕様。課題となる風景は三岸節子がアトリエを建てたフランスの小村・ヴェロンの教会です。



まず、風景の写真に、パネルの枠線を描いたトレーシングペーパーをあて、画角・構図を決めていきます。写真はパネルより少し大きく印刷されており、枠線をあてて自由に画角を選ぶことで、参加者ひとりひとりが少しずつ異なる風景を描くこととなります。構図が決まったら、片面を木炭で黒く塗りつぶしたトレーシングペーパーを被せ、風景の線をトレースしていきます。

輪郭線が描けたら、次に、写真を見ながら風景の中で暗い部分を木炭で黒く塗っていきます。すべてを黒で塗っていくような勇気のいる作業ですが、「これをする事によって、後々色を置くときに迷わなくて済むようになります。大胆に塗ってくださいね！」と先生。上から塗るクレパスと黒が混ざらないよう定着液で木炭をパネルに固定させた後、さっそくクレパスを使っていきます。



まずはクレパスのイエローオーカー（黄土色）と白の2色。これを使って、風景の明暗を塗り分けていきます。終わった人から、写真を参考に“自分の目に見える色”を上から重ねて塗っていきます。ここでも「間違ってもいいですよ、クレパスはやり直しが効きますからね」と先生。みなさん集中して色を重ねていきます。

緑、青、黄色、茶色…と色が増えてきたところで、先生から新たな技法のレクチャーが。ペトロール（油彩用の溶き油）に刷毛を浸し、色の濃いところからポンポンとたたけば、クレパスのざらっとした肌がぼかされ、やわらかな空気感を表現することができます。また、色を重ねたところをパレットナイフで細く線を引くように削れば、下に塗った色が覗き、立体感、奥行きが出てきます。これらの技法を教えてもらい、自分なりに仕上げていくみなさん。同じ風景を描いているにもかかわらず、印象派を思わせる淡い色の作品や、青を印象的に使った作品など、まったく異なる雰囲気の作品ができあがりました。最後には「クレパス買って帰ろうかな」「家でも完成まで仕上げたいと思います」といった声も聞こえてきました。



参加者のみなさんから大好評をいただいた今回。ひとつの画材に注目して、その画材の専門家から使い方を教わる形式で企画しましたが、これからも美術に親しむ場、芸術家から直接学べる場をみなさんに提供できるよう、イベントを開催していきたいと思いました。

（学芸員 大村菜生）

※「クレパス」は株式会社サクラクレパスの登録商標です。同社の許可を得て名称を使用しています。